
かなしみ

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かなしみ

【Nコード】
N7747Q

【作者名】
大森ろら

【あらすじ】
同棲相手と一緒に生きてきた猫が死んだ。とても可愛がっていたはずなのに、全くなしみを感じない女性の心を丁寧に描いた物語。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。
<http://rorra.ikidane.com/>

すみれが亡くなったのはその夜だった。

涼子は十一時頃にベッドにはいつて音楽を小さな音で聴きながら雑誌を読んでいた。なにか隣の部屋でがたがたやっているなとおもったけれど、さほど気にはしなかった。それからしばらくして部屋のドアをノックする音が聞こえると、なぜかつめたい金属をおしつけられたようにひやっとした。彼女は上半を起こして、「開けていいよ」といった。

扉をあけた義則は、悪い、とまず謝ってから、すみれが死んだことを告げた。涼子は彼のあとについて隣の部屋へいき、ベッドのうえに横になっているすみれの姿をみた。一目ですみれが死んでいるのはわかった。そこにいるすみれはなんだか硬い感じがした。生きているときはそんなふうではなかった。

「最近、あんまり餌を食べなくなってたんだ。獣医にもみせたけど、年齢的なものを考えるとこのまま静かに逝かせてあげるほうがいいだろうっていわれてさ」

そう、とだけ涼子はいった。いつ獣医にみせたんだろう、全然気づかなかった、と彼女はおもった。

触ってあげてよ、と彼がいったので、彼女はベッドに腰をおろして、すみれをすこしだけ撫でた。おもったより毛がばさばさとしているのに驚いた。

「苦しんだ？」

「どうだろう」

涼子が顔をあげると、彼は泣いていた。そのことに彼女はすこし驚いて、驚いた自分にすこし違和感を覚えた。

「お別れ、してやってよ」と彼が涙声でいうので、うん、と涼子は頷いてうつむき、またすみれを撫でた。彼が部屋を出ていく音がした。

十分ほどして、またドアをノックする音がきこえ、遠慮がちにドアがひらいて、義則が顔をのぞかせた。

最近のすみれはよく鳴いていた。

昔はそうではなかった。どちらかというとき寡黙な猫で、餌をまちきれないときにだけかすかに声をあげるぐらいだった。

それが、ちらつとひとの顔をみただけでやたらにやあにやあと鳴きはじめるようになっていた。鳴き方はいつもどこか一本調子で、彼女の姿がみえなくなるまで鳴いていた。

別におなががすいて鳴いているわけではない。義則は自分の帰りが遅くなっても大丈夫のように、毎朝、餌皿にキャットフードを山盛りにしていった。水も三つほど皿に満たしていった。

すみれが鳴きはじめると、涼子はたまに義則の部屋をのぞきにいった。するといつもすみれは彼のベッドのうえで丸くなっていて、彼女の顔をみると口を大きくあけた。餌はちゃんとあるし、水もひっくり返したりはしていない。それでもみやあみやあ鳴いているので、「どうした、スー」と呼びかけてみる。するとすみれは自分が警報器にでもなったみたいに鳴き声のヴォリュームを二メモリほどあげる。わかったわかった、もうすぐ帰ってくるからね、といって涼子は慌ててドアを閉めた。

すみれはもともと義則が飼っていた猫だった。友達からもらったそうで、別に血統書付きの猫というわけではない。白と薄茶の毛で、尻尾は長くしなやかだった。特技といえるようなものはないけれど、以前は彼らが帰宅するとちゃんと玄関に出迎えにきてくれた。狭い玄関においた靴箱のうえにすみれはちょこんと座り、彼や彼女がドアをあけると、長い尻尾を「おかえりなさい」というようにくねらせた。

すみれが出迎えをやめたのは半年ほど前からだった。そのあたりから、抱き寄せて体を撫でていると、やけに毛がばさばさとしていくように感じられるようになった。最初は汚れているのだろうとおもったが、じきにそれは老化現象のひとつであるということに気づ

いた。すみれは平均寿命を既に越えていた。

義則が部屋を探していることに涼子が気づいたのは二週間ほど前のことだった。共有しているパソコンの履歴からわかった。

そのことを彼にたずねてみると、彼はあっさり認めた。

「すこし前から考えてたんだ。ごめんね」

涼子はショックを受け、どうして、とか、別れたいの、とたずねることもできなかった。すこし前っていつからのことだろう、と彼女はおもった。

一緒に暮らしはじめて二年ほどになり、ふたりの間の細かいルールも無理なく体になじんできたところだった。彼女は彼の話によく耳を傾け、彼のことを大事におもっていることをちゃんと伝えてきたつもりだった。

彼はいろいろな言い訳のようなものを口にしていたが、涼子の耳にははいつてこなかった。好きなひとができたんだろ、と彼女はおもった。なんとなく、そんな感じがしたこともあった。彼の雰囲気、あるときからふつと変わったことが確かにあった。

彼はひとつため息をつく、涼子に体をくっつけて寝ていたすみれを抱き上げて部屋を出ていった。それを見た彼女は、ああ、とおもった。そのときからすみれは彼の所有物に戻ってしまった。

義則が部屋の扉をちゃんと閉めないでトイレに行くときなど、すぐにすみれはリビングに出てきた。あまり一緒にいないせいか、見るたびにすみれは弱ってきているように涼子にはおもえた。足をひきずるようにしてのろのろと歩いたし、尻尾ももうふらなかった。目はどこかうつろで、口は半開きで舌をだしたまま、にやあにやあ、と激しく鳴きつづけながら彼女のところにやってくる。手を伸ばすと鳴き声はいっそう激しくなる。義則がやってくると涼子はさっと手をひっこめ、そこにすみれがいることなんて気づいてもいないようにテレビや雑誌に目をやった。彼は無言ですみれを抱え上げ、部

屋にもどっていった。そういうことが何度もくりかえされた。

そのうち涼子はあまりすみれのことを考えなくなった。

彼のことも考えないようにした。彼はリビングルームに布団をしいて寝るようになった。といっても、帰りはいつも遅く、顔をあわせることはほとんどなかった。たまに、夜ふと目が覚めると、隣から彼の声が聞こえてくることがあった。電話でだれかと話しているようだった。彼の声はやさしく、たのしげだった。

「部屋はみつかった？」

ある朝、なぜか彼は早く起きてきて、涼子が顔を洗っているところにやってきた。

「ああ、うん」と彼はいった。「今日はなるべく早く帰ってくるよ」

涼子は鏡ごしに彼の顔を見て、そう、といった。それから彼がまだそこに立ったままで見ているのを見て、「どうかした」とたずねた。

「ううん。じゃあいつてらっしやい」

すみれが亡くなったのはその夜だった。

義則は眠れなかったようだったが、涼子はぐっすりと眠ってしまった。

翌朝起きると、もう義則の姿はなかった。すみれもいないようだった。

涼子はいつもどおり、会社に行って、いつもとおなじように仕事をした。

仕事が終わると、同僚から飲みに誘われた。行ってもいいな、とおもったけれど、すぐにおもいなおして今日はまっすぐ帰ると断った。

スーパーで買い物をして帰り、カレーを作ってひとりで食べた。部屋でビールを飲みながら雑誌を読んでいると、義則がいつもより早く帰ってきた。三十分ぐらい待って、彼女はそつと自分の部屋から出た。

義則はリビングルームでビールを飲んでた。買ってきたらしい弁当には手をつけていないようだった。テレビもつけず、静かな部

屋でじつとしていた。

「おかえり」と涼子は声をかけた。

彼はふりかえり、「ただいま」とちいさく呟いた。

涼子が彼にむかいあうようにしてラグの上に座ると、彼は今日あったことを彼女に報告しはじめた。彼が愛用しているブランケットで包んだすみれを獣医に紹介されたお寺に連れていったこと。受付のようなところで手続きをしたあと、すみれを安置する場所に案内されたこと。そこはちいさな小屋のようところで、重い扉をあけると、三段ほどの簡素な棚が壁に向かいあわせに備え付けられていた。中は薄暗く、ひんやりとしていた。いくつかの段ボール箱や籠のようなものがばらばらに棚におかれていた。

彼はキャリーバッグのなかにいるすみれをもう一度のぞきこみ、頭をちよつと撫でてやった。それから小屋の中にはいり、左の二段目の棚にそつとキャリーバッグごとすみれを置いた。そして何度か浅く呼吸したあと小屋から出た。

「なんか、ごめん」と彼はうつむいたままいった。

うつん、と涼子は首を横にふったけれど、いったい彼がなにについて謝っているのかわからなかった。すみれを死なせてしまったことを詫びているのだろうか。それともすみれとわたしを引き離すような形になったことを詫びているのだろうか。それともわたしたちが別れることになったことを詫びているのだろうか。

その夜、涼子は眠る少し前に、すみれが爪とぎをしている音を聞いた。

それはリビングルームから聞こえてきた。そこには以前、爪とぎ用の板を置いてあった。しかし、いまはもうない。彼が自分の部屋にしまってしまったからだ。それにもうすみれはいない。けれど涼子は確かにすみれが爪とぎをしている音を聞いた。

かりかりかりかり、かりかりかりかり……

翌朝、涼子がコーヒーをいれていると、義則がとなりに立った。
おはよう、と彼がいったので、おはよう、と彼女もいった。
コーヒーどう？ とたずねると、うん、と彼はうなずいた。

義則はふたりのマグカップをテーブルに運んだ。

涼子は目玉焼きと簡単なサラダをテーブルに運んだ。そして昨日
買っておいたふかふかの食パンを袋ごと彼に手渡した。

涼子が冷蔵庫をあけてジャムとマーガリンを出そうとしていると、
「昨日はありがとう」と彼がいった。涼子は振り返らずに、「ああ、
うん」といった。

彼女がジャムとマーガリンをテーブルにおくと、彼は彼女を真っ
直ぐにみつめて、ありがとう、とまたいった。そして、とても久し
ぶりに、おだやかな微笑みを彼女に与えた。

それにしても不思議だ、と涼子はおもった。

どうしてわたしはかなしくないんだろう？

すみれの亡骸を見たときも、昨夜爪とぎの音を聞いたときも、不
思議なくらいかなしくなかった。すみれの死に対してなにも感じな
い自分、まったくかなしくない自分に驚いていた。すみれのことが
大好きだった頃のきもちをおもいだすことができなかった。

涼子はぼんやりと、彼がすみれを抱いて自分の部屋にはいつてい
ってしまったときのことをおもいだした。痛みを感じたのは、あの
瞬間だけだった。

さよならすみれ、と彼女は胸のなかでつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747q/>

かなしみ

2011年5月11日19時40分発行